

〈特集〉シンポジウム

区切って領有すること

——領土問題への歴史的アプローチ

特集にあたって

小谷 汪之

二〇一三年四月二〇日（土）、首都大学東京でメトロポリタン史学会シンポジウム「区切って領有すること——領土問題への歴史的アプローチ」が開催され、次の四本の報告が行われた。

小谷 汪之（東京都立大学名誉教授）

「問題提起、土地領有権紛争と近代的私的土地所有——尖閣諸島問題を通して」

板垣雄三（東京大学名誉教授）

「人類史における欧米（日本）中心主義とその終局過程

——主権／国際法／環境支配「時間および意味空間・資源空間の」／世界分割」

荒野泰典（立教大学名誉教授）

「現在日本の国境問題を境界領域の視座から考える——近世国際関係論の立場から」

区切って領有すること（小谷）

南塚信吾(NPO—IF世界史研究所長)

「積み重ねられる国境意識——ヨーロッパの歴史的経験から」

本特集はこのシンポジウムにおける報告を文章化したものであるが、板垣報告は諸般の事情で収載出来なかった。

近年、日本の国境をめぐる諸問題が一層緊迫の度を高めてきている。ロシアとの「北方領土」問題は長年の懸案であるが、このところ、中国との尖閣諸島をめぐる対立と韓国との竹島領有権問題が前面にでてきた。

本シンポジウムは、このような領有権問題(領土問題)を長い歴史的射程と広い世界的視野において再検討することを課題として開催された。その内容については、本特集のそれぞれの内容を見ていただくこととして、板垣報告について一言触れておきたい。板垣報告はその題名からも分かるように、「人類史」という広大な歴史的展望において、現在の領土問題に至る歴史過程を捉えようとするものである。特に欧米中心主義と日本におけるその亜流が形成した国際政治が世界を「区切って領有」していく過程に焦点を当てている。その意味では、板垣報告は本シンポジウムの「総論」的な性格を持つので、本特集に収載出来なかったことはきわめて残念である。